

ことになったのだ。優れた児童文学作品の中にはそれを通して近代社会ではうまく機能しなくなっている「宗教」を再創造する方向に働き、再解釈されることで大きな飛躍を見せる場合があるのである。児童文学の中で、現実を超えた空想の世界を信じることの愉悅を味わいながら、それらを心の深いところに確立することが可能となるとき、そこには伝統的なものと近代的なものが融合した新たな宗教性が顕現しているのである。

宗教体験の語りの諸相とその現代的意義

村 上 晶

周囲の人々にとっては些細なことのように見えても、本人にとっては、人生を変えるほどの大きな意味を持つものとして解釈されるような体験がある。「スピリチュアルカウンセラー」を自称する人々にとって、普段の何気ない体験も、「神」や「天使」からのメッセージとして際立たされ、特別な「スピリチュアルな」体験として語られる。そしてそうしたエピソードの一つ一つが、現在の自己とその人生を語る上で欠かせない要素となっている。

そこで本発表では、二人の「スピリチュアルカウンセラー」(共に女性)の語りを例としながら、現代社会における宗教体験の語りの諸相と、その意義を見ていった。

彼女たちの語りに共通していたのは、現在、自らの身に起こった体験をスピリチュアルなものとして解釈することに対して

は揺るがない確信を持っているのに対して、過去、とりわけそうした体験をはじめた頃とされる段階では、そうした体験に戸惑い、疑いをもっていたことが強調されているという点である。しかし、多くの不思議な体験が積み重なることによって、それが「神」や「天使」の意志によるものであるということを認めざるを得なくなったと語られる。

語りのうちに認められるこうした段階を、帰属理論の視座も借りながら詳しく見ていくと、まず初期の段階では、体験の解釈について超越的実在に直接的原因を求めることが躊躇されており、その因果関係は未確定のまま保留されていることがわかる。しかし、そうした躊躇いは克服され、本人たちが、「確信」という言葉を用いて説明しているような段階、つまり、体験の因果関係を超越的実在へと帰属させることによって、ある体験が単なる「不思議な体験」ではなく「宗教的と見なされる」(「Taves」)段階に至るといって過程が見出せる。そこから、彼女たちの語りが、自らの体験に対する解釈の転回という出来事を中心にした段階的な物語として構成されていることがわかる。

さらに、彼女たちの語りに特徴的な点として、体験中心的な側面と諸要素のブリコラージュという点を指摘する事が出来る。彼女たちが「確信」の段階で獲得したとする新たな意味体系は、教団の教義や宗教伝統などのある特定の意味体系に依存するものではなく、様々な対象から選択され自分に見合うように構成されたものである。そこでは従来、体験を意味づけ評価するものであった教義や伝統といった外的参照枠が、逆に体験によって評価されるものとなっている。

選択的に構成されたそうした「ブリコラージュ」な意味体系は、これまで「明確な規範にもとづく構造化とはほとんど無縁」であるなどとして、「流動的で不安定」であると指摘されてきた(Th. Luckmann)。こうした指摘は、今回の事例にも当てはまるものであろう。

しかし、彼女たちの語りでは、主観的に選択された種々の体系が体験の解釈を中心に構成され、また、語りの全体も不信から確信へという段階的な矛盾のない過程として描かれていた。こうした点に注目すれば、「流動的で不安定」になりがちな彼女たちの意味体系は、体験が核に据えられることによって無限に拡散していくことなく、その一貫性を保持することができていると考えられる。

なによりも彼女たちの語りは、現在の「スピリチュアルカウセンサー」である〈私〉を支える重要な物語なのである。その語りは、変化に富む現代社会の中で、その変化に寄り添いながらも、〈私〉としての同一性を保持していくための戦略を垣間見せてくれるものであると言えるだろう。

「体験の学知」としての近世西欧神秘主義批判

渡辺 優

「神秘主義」をめぐる議論において「経験／体験 experience」という概念が多かれ少なかれ中心的な役割を果たしてきたことに異論はないだろう。個人の特異な宗教的経験は、二十世紀以

降の宗教研究、神秘主義研究の主題であり続けてきた。しかし、神秘主義という概念そのものが近世西欧を起源とする固有の来歴をもつと同様、経験概念のもつ意味も歴史的文化的コンテクストと密接な関わりがある。経験という概念は、まさにその中で「神秘主義 (la mystique)」が成立した西欧近世の認識論的構造変化の中で新たな修辭的意味と権威の源泉としての役割をもつようになった。実際、近世西欧神秘主義はしばしば「体験の学知 (la science expérimentale)」と呼ばれたのである。我々の議論の焦点は十七世紀フランスを代表するイエズス会神秘家ジャン・ジョゼフ・スーラン (Jean-Joseph Surin 一六〇〇―一六五五) にある。彼は有名な「ルダンの悪魔憑き」事件に祓魔師として関わり、自らが悪魔に憑かれてから十七年近くの歳月を半ば「狂人」として送った。恢復後、この長い精神の闇路を通る中で「体験」した悪魔や神のさまざまな働きをその名も『体験の学知 Science expérimentale』(一六六三年)という自伝的テクストにまとめた。この異形の書物は、「超常の体験」に重点を置く後の神秘主義理解を大きく規定したとも言われる。

しかし、これまでほとんど論じられてこなかったが、『体験の学知』の序文をみても明らかのように、スーランは神秘に至る道には聖人など少数の人々へのみ認められた特権的な「体験」のみならず、一般のキリスト教徒に開かれた「信仰」という道があると言っている。そればかりか、体験も最後には信仰に帰着するとして信仰の優越を説いているのである。彼のいわば「信仰の神秘主義」を現代の我々がよく理解しようと試みる